

THE
HOSHINA
ACADEMY
Chamber Orchestra
“Ensemble=Harmonia”

ごあいさつ

本日はお忙しい中、保科アカデミー室内管弦楽団第7回定期演奏会に御来場頂き、誠に有難うございます。

昨年は、当団の目標の一つでもありました有森博氏との共演が実現致しました。岡山ご出身で、現代日本を代表する若手ピアニスト有森氏と、岡山大学交響楽団を母体とする当団が県内3箇所（備前市・久世町・倉敷市）で演奏会を開催することができましたことは非常に意義深いと考えております。幸いにも大勢の方々にご来場頂き、暖かい拍手と励ましを頂戴し、メンバー一同大変感謝しております。昨年4月にはもう一つの夢でありました、専用練習場『響塾洋楽堂』も完成いたしました。アマチュアオケ活動にとっての大きな問題点である練習場確保の点ではずいぶん楽になり、練習に集中できるようになりました。先日は当団後援会の皆様や、日頃お世話になっております方々や、練習場のご近所の方をお招きして『響塾洋楽堂』にてミニコンサートを行いました。梅雨時でしたが天候にも恵まれ、アットホームな雰囲気の中、楽しい一時が過ごせました。

今回は、当団音楽総監督・保科洋先生にすべてをおまかせしての演奏会です。選曲に関しましては、『とにかく先生のご意向第一で』という趣旨でございましたが、現実的には難易度や、編成などの問題で、ずいぶん先生には妥協して頂くことになりました。従来プログラムとは趣を異にしておりますが、アカデミーの個性が十分発揮される非常に意欲的なプログラムであると自負しております。演奏面ではできるだけ先生のご意向に添えるよう、そしてさらに我々ならではの保科理論の実践をめざして、少ない練習時間を大切に参りました。保科先生によりまして、さらに磨きのかかった保科アカデミーの演奏を、どうぞお楽しみに。

個人的なことで恐縮でございますが、秋山は昨年10月より川崎医科大学に転任いたしました。もともと第7回は保科先生に全体をお願いする予定ではありましたが、転任直後で非常に忙しく今回は私にとっても好都合でありました。来年は当団結成10周年ということで、元新日本フィルコンサートマスターで現在東京芸術大学助教授・松原勝也氏と、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を共演いたします。その他、保科先生の管弦楽作品も取り上げる予定でございます。どうぞ御期待下さい。

忙しい社会人が中心のため、月に一度の練習だけでは、なかなか理想通りにはいきませんが、逆にその分集中し、『保科理論』という音楽文法を最大限に利用し、理論的に能率よく練習するという方針を守ろうと思えます。運営方法、選曲内容、演奏解釈、練習形態、練習時間などのあらゆる点でこのオケは極めて個性的なアマチュア音楽団体であると自覚していますが、こうして広く皆様に演奏を聴いて頂き、御批判を仰ぐことにより、閉鎖的、自己満足的な団体に留まらないようにしたいと思います。そして岡山大学交響楽団のOBとして、また快く名前の使用をお許し頂いた恩師保科洋先生の名に恥じないような解釈・演奏を目指したいと思います。

最後になりましたが、今回の演奏会開催にあたりまして多くの方々にご協力頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。引き続き今後ともよろしく御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

それでは最後までどうぞごゆっくりお楽しみ下さい。

保科アカデミー室内管弦楽団
“アンサンブル=ハルモニア”
主宰 秋山 隆

<第7回定期演奏会>

2003/8/24 [日]

倉敷市芸文館

開 場：午後5時半

開 演：午後6時半

プログラム

Richard Wagner / Siegfried-Idyll für Orchestra

☆ワグナー／『ジークフリート牧歌』

Ottorino Respighi / Antiche Danze ed Arie per Liuto III. Suite

☆レスピーギ／リュートの為の『古代舞曲とアリア』第3組曲

< 休憩 >

Claude Debussy / Prélude à „L'après-midi d'un faune„ für Orchestra

☆ドビュッシー／『牧神の午後』への前奏曲*

Maurice Ravel / Pavane pour une Infante défunte pour petit orchestra

☆ラヴェル／『亡き王女のためのパヴァーヌ』

Maurice Ravel / Le Tombeau de Couperin , Suite

☆ラヴェル／『クープランの墓』組曲

Hiroshi Hoshina, Conductor

指揮：保科 洋

Aki Washino, Concertmaster

コンサートマスター：鷺野 亜紀

Yumiko Moriki, Flute Solo

*フルート独奏：森木 由美子

Chiaki Noda, Harp,

ハープ：野田 千晶

曲目解説

☆ワーグナー／『ジークフリート牧歌』

〈演奏時間：約20分〉

音楽好きの妻や恋人がいたら、贈り物としてまず考えられるのは、CDやコンサートのチケットですよ。どんな曲が喜ばれるだろうかと思案の方にお薦めの一曲がこれ。

12月25日の朝、妻コージマはえもいわれぬ平和な響きの音楽で目を覚ましました。この家の階段に15人の楽士たちが座を占め、ワーグナー自身の指揮によって、2階の寝室にいたコージマに誕生日のお祝いの音楽を奏したのです。この日のために、作曲から練習まですべて事は秘密裏に進められました。ところで、この演奏でトランペットのパートを受け持ったのはハンス・リヒターという人でした。彼はもともとホルン奏者でしたがトランペットは吹けなかったので、数日前から猛練習をしました。コージマに気づかれないようにしたのですが、このやかましい練習を彼女がききのがすはずはありません。コージマは、なぜリヒターがラッパ吹きになったのかわけがわからなかったのですが、いまやっとそのわけを理解できたのでした。コージマはこの曲に感動しました。それは最高の贈り物で、彼女はいつまでも自分のものとして公開はしたくありませんでした。この曲はのちに原曲よりいくらか大きな編成のための曲に変えられ『ジークフリート牧歌』という題名がつけられ公刊されることになるのですが、コージマはこれを経済上の理由からやむをえぬこととして、しぶしぶ承諾したのでした。

ちなみにここにいう〈ジークフリート〉とは、ワーグナーとコージマとの間に生まれた男の子の名前です。蛇足ながら、日本名にすると〈勝平〉というところでしょうか。

☆レスピーギ／『古代舞曲とアリア』第3組曲

〈演奏時間：約20分〉

レスピーギは、1913年に迎えられてローマのサンタ・チェチーリア音楽院の教授に就任してから、その付属の図書館の豊富な文献から過去の作曲家の作品を調べるのをこの上なく楽しみにしていました。そしてその中から気に入ったものを管弦楽用（または弦楽合奏用）にしばしば編曲していました。こうして『古代舞曲とアリア』の3つの組曲も生まれたのです。

ここでの〈古代〉というのはもちろん、歴史でいうところのギリシア・ローマの奴隷制社会を典型とする古代のことではなくて、単に〈古い〉とか〈むかしの〉という意味です。具体的には15～16世紀にかけてをさします。この頃イタリアでは、洗練された感覚と典雅な響きの弦楽器リュートの音楽が花開きました。彼はそれを近代のオーケストラに移し変えたのです。その意味で、この曲は『リュートのための古風な舞曲とアリア』ともいわれています。あるいはこっちの方が適訳なのかもしれません。しかしこれだと練習の時にいちいち言うのが大変です。それでぼくたちは、普段はこの曲を『古代舞曲とアリア』と呼んでいます。

☆ドビュッシー／『牧神の午後への前奏曲』

〈演奏時間：約12分〉

アシル＝クロード・ドビュッシー。〈アシル〉はギリシアの英雄アキレウス、〈クロード〉はローマの皇帝クラウディウスのこと。ずいぶん勇ましい名前をつけられたものです。そのためか彼は、名前負けもせずに、音楽の世界で本当に勇ましいことをやってのけました。

この曲を一言で形容すると〈ふわふわな〉曲というのが一番あたっていると思います。彼はそれまで使われていた各種の形式——ソナタ形式とかロンド形式、変奏曲といったもの——にはまったくこだわらずに不思議な音楽を描写しました。つまり、ベートーヴェンやブラームスあるいはチャイコフスキーといった人たちの管弦楽が線的な構成を基調としているのに対して、この曲はまったく別のコンセプトを持っているのです。具体的にいうと、この曲は、音楽を形づくる3つの要素（メロディ、リズム、ハーモニー）のうち、特にハーモニーを重視した音楽だということになります。ベートーヴェンが大嫌いだったドビュッシーは、「ベートーヴェンが展開部に執着するのは、もう何も話すことがないからだ」と言ったということです。彼にとって〈話したいこと〉は（いろいろな意味で矛盾するかもしれませんが）言葉の外にあったのでしょ。彼の音楽は後の作曲家に多大な影響を与え、音楽史に大きく刻まれることとなりました。

さあ、みなさんも重力の束縛からのがれて〈ふわふわ〉してみてください。あれ、この曲の紹介であの詩人の名前を出さなかったの、ぼくが初めてじゃないかな。

曲目解説

☆ラヴェル／『亡き王女のためのパヴァーヌ』

<演奏時間：約8分>

彼は自作のピアノ曲をいくつも管弦楽用に編曲していますが、人気の高いこの作品もそうした1曲です。原曲は、パリ音楽院に在学中24歳の時に書かれました。ラヴェル自身はこの初期のピアノ曲に対して「私はこの曲には多くの欠陥のあることを強く感じている。余りにもシャブリエの影響が明らかだし、形式もかなり貧弱だ」と厳しい批評を下していますが、にもかかわらず35歳になって自らそれを編曲しているように、その音楽は一度聴いたら忘れられないほど美しい情感をたたえています。タイトルには特に標題的な意味があるわけではなく、韻をふんだ語感の良さが気に入ったことからつけられたようです。

なお、三田誠広の小説『いちご同盟』にはこの曲が効果的に取り入れられています。大好きな作品です。もしよければ読んでみてください（とくに青少年諸君は…）。

☆ラヴェル／『クープリンの墓』組曲

<演奏時間：約20分>

「この曲は、クープリン個人というよりも18世紀のフランス音楽全体に捧げられた讃歌である。」（ラヴェルの自伝より）

ラヴェルは、俗に〈オーケストラの魔術師〉とか〈スイスの時計師〉とも呼ばれています。これは何よりそのオーケストレーションにおいて、精密で計算されたように無駄のない書き方が、魔術的あるいは職人的だということからきているのでしょう。それは先に演奏する『亡き王女のためのパヴァーヌ』よりも、このような曲でいっそう引き立つのではないのでしょうか。

この曲は、クープリン時代（17～18世紀にかけて）の古典組曲の形式を借りて、その上にラヴェル独特の斬新な感覚による衣装を着せかけたものです。レスピーギが『古代舞曲とアリア』において15～16世紀の音楽をよみがえらせたのとは少し意味合いが違って、これはすべてラヴェルのオリジナルです。ところで、熱烈な愛国者だったラヴェルは、第1次世界大戦が始まるとすぐに軍隊に志願しました。しかし軍部はそれを丁重に拒否しました。第一戦で戦うよりも国家のために立派な作品を書いてほしいというのがその理由でした。それでもラヴェルの熱意におされて、ついに軍部は彼を看護兵として採用しました。彼のまわりでは戦争の犠牲者が後を絶たず、彼はこの曲にその霊を弔う気持ちを込めて作曲にとりかかったということです。

ピアノによる原曲は全部で6曲からできていて、それぞれの曲は戦死した友人に捧げられています。これも、亡き音楽家を悼むため1曲宛作曲したという18世紀の風習にならったものとなっています。オーケストレーションに際して4曲にまとめられました。

<文責：山本浩之 H.11岡大オケ卒部 Va>

= 次回演奏会のお知らせ =

後援会のご案内

8/29/2004 [日]

<第8回定期演奏会>

倉敷市芸文館

ヴァイオリン：松原勝也

指揮：秋山 隆

☆ベートーヴェン／ヴァイオリン協奏曲

☆保科 洋／管弦楽作品の予定

☆シューベルト／交響曲第3番

当団後援会は年会費3000円で小学生以上の方でしたら、どなた様でもご加入頂けます。当団演奏活動のご案内と演奏会毎に2名様分のご招待券をお送りいたします。

本日お配りしている、お手元のアンケート用紙にお名前とご住所をご記入の上、入会希望欄に印をつけて頂いた方には、後日入会案内と、年会費振り込み用紙を郵送させていただきます。

下記まで直接ご連絡頂いても結構です。

後援会連絡先：700-0825 岡山市田町1-8-4 梅田 環

Tel & Fax: 086-231-3778

1887——ウイーン訪問

西 欣也

日本における音楽批評の草分である大田黒元雄氏の古い文章を読んでいたら、驚愕すべき情報に出会った。ローマ留学を二年に切り詰め、パリに戻ったばかりの若きドビュッシーが、ウイーンに住むブラームスのもとを訪ねたとする証言がある、というのである。

もちろん、弱冠25歳のドビュッシーが、当時すでに大作曲家としての名声を確立していたブラームスに面識があったわけではなく、彼はブラームスへ手紙を書いても返事をもらえなかったし、自宅を訪問すると二度までも面会を断られた。かつてブラームスに師事したことのある、とある外交官婦人の計らいによってようやくブラームスと午餐を共にする機会を得たものの、ウイーンの巨匠は「手紙をよこしたり、二遍も訪ねて来たりした若いフランス人は君ですか。今回は勘弁するけれども、二度としてはいけませんよ。」と青年をたしなめたとえ、フランス酒を呷ると「真のドイツ人はフランス人を嫌うが、酒だけは飲んでフランスのものを飲む」という『ファウスト』の一節を引用したという。

それでも、ブラームスの側で、はるばる自分のもとへやってきた若きフランス人作曲家を結局は憎からず思ったのか、あるいはドビュッシーが巨匠への深い敬意を表し、自らの優れた音楽観を披瀝したのでもあろうか、そのあたりは明かでないが、二人の出逢いはさほど不幸なものままに終わったのではなかった。というのも、ドビュッシーはその翌日もまたブラームスに会って食事をしたばかりか、「カルメン」を一緒に見に行ったり、更にはブラームスに音楽院を案内されたり、共にベートーヴェンやシューベルトの墓参りをしたりしたというのであるから。

ロンドン生まれのフランス人で『ミュージカル・タイムズ』紙の批評家であったアンドレ・ド・テルナンは、後にこうした交わりについてドビュッシーから打ち明けられた唯一人の友人であつたらしい。テルナンは、ドビュッシーの死後までこの事実を公表しないことを固く約束し、1924年になってようやくこれを明らかにしたのであった（ドビュッシーは1918年に世を去っている）。今日、ドビュッシー研究者のあいだでこのブラームス訪問が信憑性のある事実として通っているのか否か、わたしは寡聞にして知らない。しかしこの史実がテルナンの捏造に過ぎなかったのだとしても、それはなんと豊かに想像力を喚起する、気の利いた捏造であろうか！

いかにも、ドビュッシーとブラームスの交友というのは、突飛でもあり、センセーショナルでもある。音楽史的に見るなら、ドビュッシーは、伝統的な形式や機能と声の約束事から音楽を解放し、「近代」音楽への第一歩を踏み出した作曲家と見なすのが定石であって、その場合、ドイツ語圏における革新主義者ワーグナーと保守主義者ブラームスとを当時対立していた二大勢力の象徴と見なすならば、彼はブラームスとは反対の位置にいること、疑いないのだから。

じじつ、たとえば交響曲という表現形態は、ドビュッシーにとって、すでに形骸化した過去の遺物に過ぎなかった。わたしは以前にも、このことについて書いたが、ここでもう一度、ドビュッシーが1901年に書くことになる文章を参照しよう。「ベートーヴェン以後交響曲が無用となったことは立証済みであるように、私にはおもわれる。実際、シューマンの場合もメンデルスゾーンにあっても、交響曲は、すでに力がおとろえた同一の形式のうやうやしくくりかえしでしか、もう、ないではないか。」ベートーヴェン以後「無用となった」交響曲をなおも「うやうやしく」繰り返していた作曲家として、ブラームスの名前を思い浮かべぬ人はいない。この時代遅れな表現の信奉者とその告発者とが交友を持ったことがあるとしたら、これはある意味でスキャンダルともいえるものではなからうか（そしてドビュッシー自身がそれを秘密にするよう要求したことも、十分に納得のいくことではないか）。

いや、それともわたしたちは、ドビュッシーが、ブラームスの古典主義志向の中には例外的に、古い形式の反復以上のものを見出していたと推論するべきであろうか。確かに、そのように考えるとき、上の文章の中でシューマンやメンデルスゾーンと並んでブラームスの名が挙げられていないという不自然な選択も、意味ありげなものに思えてくる。ことによると、「伝統に対するあなたの配慮は、よく言われるような反動的なものではなく、そこには他の交響曲作家の場合とは異なった、特別のものがあるように思います」といった言葉がドビュッシーの口から発せられ、これが二人の精神的な絆を強めることに役立ったといった事情があつたかもしれ

れない。あるいはまた、わたしたちは、ドビュッシーと会って後のブラームスが、もはや交響曲の書き手でなくなってゆくことに注意を払うべきであろうか。四曲のシンフォニーや協奏曲をこの年までに書き上げたブラームスは、これ以後は大編成のオーケストラ曲には背を向け、もっぱらピアノ曲や歌曲、そしてもちろんクラリネットを含んだ室内楽へと取り組むようになるからである。そうした方向への動機づけの一つとして、ドビュッシーの音楽観による働きかけがあったことを想定するのは、行き過ぎというものであろうか。

こうした際限のない空想に身を任せるのは大きな楽しみではあるが、実はわたしがテルナンの主張を魅力あるものだと感じたのは、それが、こうした事実の穿鑿よりほかの、もっと直截で、もっと芸術家の創作の深い部分に関わる思索へと導いてくれるからである。そこには、ドビュッシーのように自らの感性を頼りに音楽を大胆に変革した芸術家ですら、過去の伝統を侮ったり無視したりするのではなく、これと誠実に向き合うことを必要とした、という事実が示唆されている。いや、より正確に言えば、自らが乗り越えようとする伝統と真摯に対峙することができたからこそ、彼は逆説的にも「自分の耳で」何を聴くべきかを、一つ一つ入念に探り出してゆくことができたということ、わたしたちはそこに認めることができるのである。

もっとも、このような創造の論理は、なにもドビュッシーに限らず、全ての優れた芸術家に当てはまることだ。だが、わたしたちは、ドビュッシーを考える際には特に注意ぶかく、このような「過去との対峙による乗り越え」を意識していなくてはならないのではなからうか。それは一つには、ドビュッシーの音楽が、現在のわたしたちにとって、あまりにも肉感的で親しみやすい魅力をもって響くために、その背後にある強靱にして精緻な反省的要素がともすると忘れ去られがちだからである。かつて吉田秀和氏は、ドビュッシーの生涯にわたるピアノ曲の創造の展開のうちで、伝統へのつながりと、その中での自分の位置への意識がたえず検討されていたのではないかと、といったことを書いていたが、わたしもそのとおりであると思う。このような認識は、ドビュッシーの音楽が、さしあたり抽象的な動機分析や形式感覚を経由せずとも、わたしたちの耳に十分に満足を与えてくれるからこそ、却って必要なのである。(全く同じことは、印象派の絵画についても言いうる。誰もが魅力を感じるその感覚的洗練が、背後にある合理的で分析的な知性の存在を忘れさせるよう、いつも働いている。)

思うに、芸術創造の歴史は、一見正反対のものが共通の根に由来していたり、一見よく似たものがかけ離れた性向の帰結であったりといった奇妙な逆説に充ち充ちている。そこでは、<革新的芸術家>対<保守的芸術家>といった単純な図式はほとんど意味をなさないように見えるほどだ。現にドビュッシーは、交響曲の作者でこそなかったが、すぐにアンチ・ワグネリアンへと転じていったし、ベートーヴェン以後の最も偉大な交響曲作者の一人であるブルックナーは熱烈なワグナー崇拝者ではなかった。

ドビュッシーとモーリス・ラヴェルとの関係を語る際にも、わたしたちには同様の注意が必要だ。ドビュッシーとラヴェルの二人の音楽が、どちらも、豊かな色彩に溢れた、軽やかな戯れと知的洗練の音楽であるとは、誰もが言うところだ。しかし、やはり誰もが聴き落とし得ないのは、その二人の「遊戯」の質が全く異なっていることだ。その違いは、わたしにはこう感じられる。ドビュッシーでは、いわば遊ぶことを禁じられた世界で初めて解放の遊戯を演じる者の、厳粛さと緊張が絶えることがない。一方、ドビュッシーにわずか数十年遅れて生まれたラヴェルは、そうした切実さをすっかり免れている。もちろん、彼の音楽はどこをとっても面白く響くよう、十分に工夫され、しかもそれが成功している。ただ、完全な技巧に裏付けられ、絢爛に、かつ精確に戯れることに専心する彼の様子が与える印象は、ドビュッシーの場合とは逆に、どんなに深刻な主題を扱っていても、常に、どこか本気でないようなところがある。これは、人がラヴェルの「アイロニー」ないし「粋」と呼ぶところの魅力であろうか。ともかく、そこでは真剣さが遊戯を支えているというよりは、一貫して遊戯が真剣さを裏打ちしているように響くのである。

おそらくはそのせいであろう、モーリス・ラヴェルが、伝統における自らの位置をめぐる探求心から、ウィーンの大音楽家のもとを密かに訪れる様子を、わたしは思い浮かべることができない。すくなくとも、仮にそのような事実があったとして、それが人々の想像力を豊かに刺激することは、ないに違いない。

(にしぎんや・平成3年岡大オケ卒部 Vc、関西大学他非常勤講師)

プロフィール

保科 洋 (ほしな ひろし) : 名誉指揮者、音楽総監督



昭和 11 年東京に生まれる。両国高校卒業後、昭和 29 年東京芸術大学作曲科に入学。昭和 35 年同大卒業とともに、毎日コンクール作曲部門管弦楽部の部第一位入賞。昭和 38 年には、文部省芸術祭奨励賞受賞。東京音楽大学、愛知県立芸術大学を経て、昭和 58 年兵庫教育大学教授。平成 13 年 3 月定年退官し同大名誉教授となる。作曲・指揮の両面で活躍。

吹奏楽の作曲においては、日本を代表する一人で、海外でも評価は高い。全日本吹奏楽コンクール課題曲も過去 3 回委嘱されている。

作曲家としての見地から、また多くのアマチュア音楽団体の豊富な指導経験と、理論的根拠に基づく独自のユニークで説得力のある音楽解釈は、近年注目を集め高く評価されている。それらの集大成として、音楽の友社より『生きた音楽表現へのアプローチ』=エネルギー思考に基く演奏解釈法=(保科 洋著)として出版された。類書のない理論的音楽解釈法として、アマチュア音楽愛好家はもちろん専門家の間でも評判になっている。

主な作品に、「カタストロフィ」「古祀」「吹奏楽のためのカプリス」「愁映」「風紋」「パストラール」「祝典舞曲」「響宴」「管弦楽のための変奏曲」、創作オペラ「はだしのゲン」などがある。

秋山 隆 (あきやま たかし) : 常任指揮者



昭和 40 年、岡山市に生まれる。高松中学校吹奏楽部にて奥原弘巳氏に指導を受け、当時新設の岡山一宮高校に進学。岡山県では初の、学生指揮者による吹奏楽コンクールA部門金賞受賞として注目される。

昭和 59 年岡山大学医学部入学と同時に岡山大学交響楽団にトランペット奏者として入部。現役時代には学生指揮者を務め、卒部後サブコンダクターとして、常任指揮者保科洋氏のアシスタントを行い今日に至る。

平成 6 年当団を同級生後輩らと独自に組織し、責任者兼指揮者として活動。第 4 回定期演奏会後、アメリカ留学(カリフォルニア大学バークレー校)に伴い、当団も活動を停止。帰国後活動再開。トランペットを鈴木勝久氏に師事。指揮法を奥原弘巳氏、保科洋氏、David Milnes 氏に師事。

平成 3 年医学部卒業後、病理学教室(岡田茂教授)大学院生となる。昨年 10 月より川崎医科大学病理学教室講師。医学博士・病理専門医。妻は当団ヴィオラ奏者。二児(中 1 男、小 4 男)の父。

鷲野 亜紀 (わしの あき) : コンサートマスター



旧姓：盛田。5 歳より(故)木村善之氏にヴァイオリンを師事。

岡山一宮高校卒業後、岡山大学文学部言語学科入学と同時に岡山大学交響楽団に入部。同団コンサートマスターを務め、第 38 回定期演奏会ではサン＝サーンス作曲『序奏とロンド＝カプリチオーソ』を共演し好評を博す。

当団発足時からのコンサートマスターであるとともに、岡山交響楽団及び岡山大学OB交響楽団でもコンサートマスターを歴任し、遺憾なくその才能を発揮している。『アンサンブル＝アルケミー』における室内楽の分野でも高い評価を受けている。

第 5 回定期においては、チャイコフスキー作曲/組曲第 4 番『モーツァルティアーナ』終曲、昨年(第 6 回定期)ではベートーヴェン作曲『ロマンス』でも素晴らしい独奏を披露し、絶賛された。

当団トランペット奏者鷲野氏と結婚後、島根県に居住。一児の母。現在、島根県立安来高校英語科教諭。同校弦楽同好会顧問。

演奏会によせて

有田 耕司

音楽に、とりわけ音楽を演奏するときに、もっと限定すれば合奏するときに一番大切な要素は「愛」だと思う。

我々はアマチュア音楽家であるが、アマチュアにとって「愛」無き行いは自らの存在意義を否定するものであることをその言葉自身が物語っている。

「アマチュア」という言葉は「素人」とか「趣味や余技として行う人」など、一般にプロフェッショナルに比べ一段劣る理解がされている。しかしながら語源をたどると、「アマ」がイタリア語のアモーレと同じラテン語から派生していることから想像がつくとおり、本義は「(対象を)愛する人」であり、本来の意義には職業としているかとか、どれだけ技術が優れているかなどは関係なく、どれだけ愛しているかだけが問われているのである。

余談になるが、ピーター・シェーファーの戯曲、映画にもなった「アマデウス」のアマも同じ語源、デウスは神であるから「神に愛された子」であり、この戯曲の主題である、モーツァルトの才能がわかるだけの才能があるものの、自らにはそれだけの才能がないことも痛いほど感じてしまうサリエリの哀れをタイトルで表すには「モーツァルト」でもなく「ヴォルフガング」でもなく「アマデウス」でなくてはならないわけだ。

さて、「アマチュア」であると自ら名乗ることは誇りを持ってなされねばならず、そしてその裏付けとして深く音楽するという行為を愛していなければならぬことがわかりたいだけだと思う。

オーケストラは何十人もの人が指揮者のもとに集い、それぞれが音を繰り出し、それぞれの音が意味ある結合というプロセスを経て音楽として紡ぎ出されていく。

指揮者の役割は重い。時には百人を超える音楽家の心を一つにまとめる。そこには強権だけでは為しえない、人々の心をつなぐ何かが必要だ。

それが「愛」だ。

しかしながら指揮者の愛だけでは偉業は為しえない。指揮者からほとぼしる愛はプレーヤーから愛を引き出し、個々のプレーヤーの愛は指揮者に返されるのみでなく他のプレーヤーにも注がれる。

ある人を愛するとはその人の存在を強く感じることだ。音楽の合奏ではお互いの存在を強く感じて暗黙のうちに一瞬のうちにオーケストラ全体の愛の結晶を創り上げていく。

本日のオーケストラは岡山大学交響楽団で保科先生のもとに集い音楽を通して、それとは知らず愛を学んできた者たちが、愛することの喜びが忘れられず活動を続けている。

彼らの愛は保科先生という触媒を介して倍加して聴衆の皆さんに注がれる。もし彼らの愛の表現がお好きならば、それを楽しむ事への集中と拍手という形で彼らに愛を返してあげて欲しい。そのことが彼らをより一層勇気づけ、さらに深い愛を皆さんにお届けすることになる。

(ありた こうじ S.54 岡大オーケストラ部 Tp)

杉原 陽一

「おじさん、禁煙車 20 の C、岡山まで往復ね！」

いい加減、覚えた。月に一度のアカデミーの練習のたびにこのセリフをはく。これだけで私が何の楽器を演奏しているのか分かるだろうか？ オケ人かつ新幹線マニアな人だな…きつと。そう、20 の C とは新幹線の座席である。なかなか、ここまで特定の席を指定する人はいないだろう。車両の一番後ろの席、通路側。新幹線の一番後ろの席は、席の後ろに大きなスペースがある。そこに楽器を横たえ、通路側の座席に座り、岡山に到着するまで見張る。“自分の”というより、“楽器の”指定席を予約しているのである。在来線の時間を合わせると、片道なんと5時間(;-_-) = 3トイ…私は千葉在住の保科アカデミー・チェリストなのだ。ただし、これは私に限ったことではない。保科アカデミーは岡山県外団員が非常に多い。では、なぜみんなこの場所に集まるのだろうか？

会社の同僚によく「似たようなオケは関東にもあるんじゃない？ 岡山にまで行って、やる価値あるの？」と、いぶかしげな顔で尋ねられる。その問いに対する答えは決まっている。「価値なきや、行かねーよ！」…即答だ。保科アカデミーは、ネオというべきかオールドというべきか分からないけれど、第二の岡大オケ(岡山大学交響楽団)だ。岡大オケを卒部したのに、岡大オケをやりたくてたまらない、そんなエネルギーが集約した団体であるともいえる。このような岡大オケ中毒者群は以下のように生成される。

『“岡大オケの音楽”とは、“保科洋の音楽”と同義であり、団員全員がその音楽に共感し、それを愛する。そして、それを完成させようとする過程で生成される。』

—こんな限定思想的なオケないぞ？ 現役以外の団体ではここだけだ。もちろん、我々は(先) (保科先生の愛称で、せんと読む)の描いている音楽の何割をも完成していないだろう。しかし、それに近づきたい、近づこうとして、はまりにはまってしまうのである。保科アカデミーは目標がこのように団員全員で一致していて、さらに、自分たちで考えてその音楽にプラスアルファして行く何でもありのフラットな音楽団体である。さあ、お分かりいただけたでしょうか？ 学生時代の4年間、どっぷり“保科節”に浸かり続けた保科教信者にとって、ここまで魅力的な活動場所は世界中を探してもここにしかないのだ。

最初の問いにもどろろ。「では、なぜみんなこの場所に集まるのだろうか？」

—答えは単純明快。ようするに保科アカデミーで演奏するのが楽しいのである。

今宵は我々が現役のときから培ってきたモノと保科アカデミーならではの“こだわり”をミックスした音楽を楽しんでいただきたい。今回は(先)の選曲、(先)の指揮。我々も、観客のみなさん以上に楽しむつもりである。

(すぎはら よういち H.13 岡大オーケストラ部 Vc)

過去の演奏活動

1994/8/7 [日] サンバルホール沼隈 (福山市)

<チャリティーコンサート> 指揮: 秋山 隆
☆ベートーヴェン/交響曲第1番ハ長調 その他

1995/8/6 [日] 倉敷市芸文館

<第1回定期演奏会> 指揮: 秋山 隆
☆モーツァルト/歌劇『劇場支配人』序曲 K. 486
☆チャイコフスキー/ロココの主題による変奏曲
チェロ独奏: 山崎 泉
☆ベートーヴェン/交響曲第1番ハ長調

1996/8/17 [土] 三木記念ホール (岡山市)

<第2回定期演奏会> 指揮: 秋山 隆
☆モーツァルト/歌劇『ドン・ジョバンニ』・ハイライト
☆モーツァルト/交響曲第41番ハ長調『ジュピター』

1996/11/9 [日] 兵庫県東条町コスミックホール

『中学音楽共通鑑賞教材』 & 『指揮法ビデオ講座』
ビデオ収録 (指揮・解説: 保科 洋)
☆ベートーヴェン/交響曲第5番『運命』 その他

1997/8/16 [土] 岡山市市民会館大ホール

<山本拓也氏追悼演奏会> (指揮: 秋山 隆)
第1部: 保科アカデミー室内管弦楽団
☆ストラヴィンスキー/組曲『ブルチネルラ』より序曲
☆水田年紀/弦楽オーケストラと2つの独奏楽器の為の
『追憶』~T. Y. に捧ぐ~ (委嘱作品・初演)
☆ラヴェル/『亡き王女のためのパヴァーヌ』
☆R. シュトラウス/『四つの最後の歌』より、
III. 眠りにつこうとして ソプラノ独唱: 岡崎 順子
第4部: 山本拓也『復活』オーケストラ
(保科アカデミー及び岡山大学交響楽団の
現役・OBを中心とする特別編成のオーケストラ)
☆マーラー/交響曲第2番ハ短調『復活』
第1楽章 第4楽章 第5楽章より (編曲: 秋山 隆)
アルト独唱: 矢内 淑子 ソプラノ独唱: 岡崎 順子

1997/9/17 [日] 倉敷市芸文館

<第3回定期演奏会> 指揮: 秋山 隆
☆モーツァルト/歌劇『フィガロの結婚』序曲
☆同/VnとVaの為の協奏交響曲変ホ長調 K.364
(ヴァイオリン: 松原 勝也・ヴィオラ: 古川原 裕仁)
☆ベートーヴェン/交響曲第2番ニ長調

1998/8/23 [日] 倉敷市芸文館

<第4回定期演奏会> 指揮: 秋山 隆
☆ブラームス/『ハイドンの主題』による変奏曲
☆モーツァルト/ホルン協奏曲第2番変ホ長調 K. 417
ホルン独奏: 杉本 賢志
☆メンデルスゾーン/交響曲第4番イ長調『イタリア』

2001/4/15 [日] 倉敷市芸文館

<活動再開記念特別演奏会> 指揮: 秋山 隆
☆テレマン/ヴィオラ協奏曲 (独奏: 古川原 裕仁)
☆バッハ/オーボエとヴァイオリンの為の協奏曲
(オーボエ: 津上 順子・ヴァイオリン: 篠崎 史紀)
☆モーツァルト/ヴァイオリンとヴィオラの為の
協奏交響曲変ホ長調 K.364
(ヴァイオリン: 篠崎 史紀・ヴィオラ: 古川原 裕仁)

2001/9/22 [土] 兵庫県東条町コスミックホール

<第5回定期演奏会記念東条町特別講演>

2001/9/23 [日] 早島町『ゆるびの舎』

<第5回記念定期演奏会>

☆J・シュトラウス/喜歌劇『こうもり』序曲
☆保科 洋/管弦楽のための『懐想譜』(初演)
☆チャイコフスキー/組曲第4番『モーツァルティアーナ』
より終曲 Vn Solo: 鷺野亜紀 (以上指揮: 秋山 隆)
☆ブラームス/交響曲第3番ハ長調 (指揮: 保科 洋)

2002/8/18 [日] 備前市市民センター

2002/9/14 [土] 久世町エスパホール

2002/9/15 [日] 倉敷市芸文館

<第6回定期演奏会> 指揮: 秋山 隆
☆ベートーヴェン/『ロマンズ』へ長調
ヴァイオリン独奏: 鷺野亜紀
☆ベートーヴェン/ピアノ協奏曲第1番ハ長調
ピアノ独奏: 有森 博
☆ベートーヴェン/交響曲第3番変ホ長調『英雄』

2002/11/14 [木] ホテルグランヴィア岡山

<日本病理学会総会懇親会> 指揮: 秋山 隆
☆モーツァルト/アイネクライネナハトムジーク その他

2002/11/23 [土] 兵庫県東条町コスミックホール

<井澤利ピアノ演奏会> 指揮: 保科 洋
☆レスピーギ/リュートの為の古代舞曲とアリア
☆モーツァルト/ピアノ協奏曲第12番イ長調
ピアノ独奏: 井澤 利

2003/8/23 [土] 兵庫県東条町コスミックホール

<第7回定期演奏会特別公演> 指揮: 保科 洋
☆ワーグナー/『ジークフリート牧歌』
☆レスピーギ/リュートの為の古代舞曲とアリア
☆ウェーバー/クラリネット小協奏曲 (独奏: 藤井一男)
☆ラヴェル/『亡き王女のためのパヴァーヌ』
☆ラヴェル/『クーブランの墓』組曲